笠亭仙果の江戸紀行：
天保三年『ふしまちの日記』(解題,翻刻)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1994-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1475

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

笠亭仙果の江戸紀行

――天保三年『ふしまちの日記』（解題・翻刻）――

石川　了

一　はじめに

文政十二年夏頃、書簡を以て江戸の柳亭種彦門下となった高橋広道こと笠亭仙果は、この年二十六歳で、尾張熱田神宮領の里正（庄屋役）であった。すでに郷里で五、六部の戯作を述作刊行していた仙果だったが、この二年後の天保二年正月、合巻『合物端歌弾初』を種彦の校訂で鶴屋仙鶴堂より刊行し、江戸戯作界に初登場する。以後天保十年まで毎年合巻を江戸表で出し続ける一方、すでに国を離れていた父親の放蕩が遠因で生活は困窮し、四十一歳の弘化元年ついに破産、熱田中瀬町の生家もすべて人手に渡す。そして翌々年の同三年二月二十五日、居を江戸に移すべく熱田を旅立つ。仙果が戯作者として名声を得、師号を嗣いで二世柳亭種彦となるのは、いうまでもなく江戸で生活するようになってからのことであり、黒川春村から浅草庵の狂歌号を譲られて四世浅草庵を名乗るのも、江戸へ転居した年の秋のことであった。

さて郷里時代の仙果は、戯作活動や狂歌活動のため、また生活の糧を求めて、次の五度にわたって江戸へ出ている。

一度目　天保三年三月十九日に出発して五月頃帰省。

二度目　天保六年春に出発して六月に帰着。帰路は木曽街道を利用。

三度目　天保七年四月中旬に出発して七月前後の頃帰着。
四度目　同年九月下旬に出発して年内に帰着。
五度目　天保十三年三月八日に出発して四月十七日帰着。帰路直前九日間ほど栃木方面へ旅行。

これらのうち、五度目については『おもひのまゝの日記補遺』なる自筆の紀行日記一冊が残っている（「集古」昭和壬申〈七年〉一～五号、癸酉一・三・四号に翻刻がある）。また二度目に際しては、花山亭笑馬らの友人が尾張でその帰りを待ち請け、『笠亭主人待受一会東海道中滑稽譚』なる咄本を刊行している。

以上は、おおむね拙稿「初代笠亭仙果年譜稿」（「大妻女子大学文学部紀要」十一、二、四～六号）でふれているので、一々典拠等を示さなかったが、四度目の江戸行のみはその後に知りえたので、左に記しておく。

田中道麿編『万葉東語栞』の仙果書写本（筑波大学図書館蔵）の奥書に、「右万葉東語栞一巻天保七年季秋赴東都之時節／旅独臥徒然之余経数宿転写之／菊月念四日　於西坂駅中屋東店下書　広道」とある。熱田を出たのは九月二十日頃であろうか。また仙果の随筆雑著『よしなし言』十二編に、「弘化四とせの初春、この江戸のとしのはじめのさま、おのれはじめて見る」とあるから、四度目も年内に帰郷したに相違ない。

二　『ふしまちの日記』解題

ここに全文を紹介する『ふしまちの日記』は、右の第一回目江戸行の往路の日記で、鈴木重三氏の御所蔵本である。氏が紹介されるのを待ち焦がれていた筆者としては、代わって翻刻せよとの御下命を望外の喜びとする。以下、書誌と伝来、内容とその周辺の順で記す。

書誌と伝来　写本一冊。大きさは縦二十三・二糎、横十五・七糎。朽葉色の横刷毛目模様の表紙左上寄りに、子持ち枠

の刷り題簽がある。書外題「ふしまちの日記 はこやなきの記の上 くだりの巻」。扉題「はこやなきの記の上 ふしまちの日記 くだりの巻」。内題「はこ柳の日記上 ふしまちの日記とも」。構成は扉一丁と本文（墨付二十九丁と一行）からなる。本文用紙は四周双辺半丁十行の罫入り茶色刷り用紙で、板心には魚尾の他、「海雲深処蔵」と刻されている。蔵書印は、表紙見返しに「宍戸文麿一第244号一共（ママ）冊」（横書横楕円形。三段に正切られている中段の算用数字は墨書き）、扉に一宍戸昌／蔵書記」（陰刻正方形）、最終丁裏の最終行下部匡郭外に「鈴木」（円形）とある。扉の裏に墨筆による左の識語がある。

尾州熱田人元神領庄屋高橋仙果弥太郎稿自筆にてこのぬしせんくわ／といふ黒印あり此書ハ／明治十六年三月廿一日東京市本郷森川町書林ニ於テ偶／然購得ラレタリト錦窠翁ノ談ホリシ又此仙果ハ／翁ノ病家ニテ居常往復セラレタリシカ頗洒落ノ／一奇人ナリシト／明治廿六年五月錦窠翁ヲ訪ヒ譚偶仙果ノ事／ニ及フ此書ヲ出シテ示サル因テ借覧ノ后走筆／謄写ス五月十六日旧暦四月朔也

この識語と蔵書印から、本書は錦窠翁所蔵の仙果自筆本を、明治二十六年五月に宍戸昌（文麿）が転写したものであることがわかる。錦窠翁とは、我が国最初の理学博士となった、名古屋出身の医家にして本草学者の伊藤圭介その人である。その伝については、早く雑誌「太陽」の明治三十二年六月臨時増刊号「明治十二傑」に選ばれ、吉川弘文館の人物叢書にも杉本勲氏『伊藤圭介』（昭和三十五年、新装版同六十三年）の一冊があるので、ここでは詳述しない。仙果と圭介の交流については、天保期の圭介宛仙果書簡四通（国会図書館蔵、投薬依頼等の記載がある）によって知られ、また『よしなし言』六編には、天保六年三月の嘗百社本草会の目録『乙未本草会物品目録』の刊本（『名古屋叢書』三編第十九巻に影印がある）に未収となった圭介の詩と序が書き留められている。特に書簡は右の識語と符号一致して興味深いが、その詳しい紹介は別の機会に譲りたい。圭介は仙果よりもわずか一歳の年長だが、仙果が明治元年に六十五歳で没したのに対し、圭介は九十九歳の長寿をまっとうして同三十四年に没した。

仙果自筆本を転写した宍戸昌は、前述杉本氏著書等によれば圭介の門人で、明治二十三年十月に上野公園美術協会で開筵された圭介米寿賀会の幹事三人のうちの一人であり、翌年刊行された賀会の出版物『寄贈之書画並出品解説』（所収書

籍総数七百冊）の編輯者となっている。

圭介が明治十六年に自筆本を入手した森川町（東大正門前の現本郷六丁目）の書林は、当然古書店であったはずで、森鷗外が『雁』第一章の中で、森川町には「当時（明治十三年）古本屋が西側に一軒しかなかった」と記しているその店かとも思われるが、特定できない。

内容とその周辺　まず書名の意味であるが、本文にも見える如く、三月十九日臥待月の夜に出立したので「ふしまちの日記」と題したことはいうまでもない。「くだりの巻」とあるのは、東下りの意味で、本書を「はこやなきの（日）記」の「上」と位置づけているのは、その「下」として帰路の「のぼりの巻」を意図していたからであろう。あるいはその「中」として、江戸滞在日記を予定していたかもしれないが、いずれもその存在を確認できない。総合書名における「はこやなき」は、春の季語にして種彦の亭号をかけている。

本文は、今回の旅の動機と同行者及び餞別の詩歌をまとめた前文（一丁と二行）と、紀行日記から成る。

前文から述べると、動機については、種彦から「一度ハ江戸の様も見よ、口親教諭でハえあるまじきこともあんなるを」といわれたことに明らかである。戯作者として江戸の世態・風俗・人情に直に接することが目的だったことは当然として、何よりも師種彦に初めて会うことがその第一であったろう。現にこの日記は種彦宅に到着したところで終わっており、「師も家にありて、たがひによろこびあひ、うれしさかぎりなし」と結ばれている。

ではそれまで仙果は、まだ見ぬ師をどの程度知っており、どう思っていたのかといえば、『よしなし言』四編所収の文政十二年五月頃執筆の一文に、

江戸柳亭ぬしは、姓は高屋、源姓也。俗称彦四郎とて、御猟本小普請ぐみ也。実名知久（トモヒサ）、下谷御徒士町御先手組屋敷にすめり。柳千株うゑて薪にたるといふ古語にて、足薪となのらんとして、その語の本出をわすれつとて、なのらず。たゞ還魂紙料の序に一ツのせられたるのみ。愛雀軒といふ。庭に米をまきて、雀のよるをたのしむ。花押はヒ

コ、かたかなのひこをくみたるを三ツあハせて、三ツ彦の印と人よぶ。いたつての下戸にて、物がたきうまれ也。飲食を嗜しまず、つねの三餐の外余食なし。尤麦飯をこのむ。戯作者にハまれなる人物也。藤原宇末岐ぬしの孫女を妻とす。文政丑どし（十二年）四十七歳、江戸をはなれずして、万邦の風俗土地のさま、よく心得たり。著述の道、予きける事おほし。

とあり、その心酔ぶりがうかがわれる。初めて江戸へ出るこの天保三年、仙果は二十九歳、種彦は五十歳である。

道の友は山本某と、出発間際に同道をいい出した小川千瑲の二人である。山本某は「御倉の官のつかさ人」とあるので、尾張藩蔵奉行の配下と思われるが、仙果が「わが主人も同じ人」（三月廿三日条）といっていることからすると、熱田奉行の配下かもしれない。仙果たちとは新橋で別れ、「これより山本某は南へ入て、とのゝ御くらやしきへゆかる」（廿八日条）とある。新橋まで来て右折して南へ下れば、新橋川下流をはさんで浜御殿と向いあう尾張藩蔵屋敷がある。旅の用向きは恐らく公務であろう。

小川千瑲（ちゆら）は平出順益や小寺玉晁らが組織していた名古屋の文士グループ耽古連の一員で、玉晁の『人物図会』に「松尾屋新兵衛（鶴重町七間町貝服町ノ間中程南側ニ住ス）。実、水口屋伝兵衛之男也。幼名仁三郎ト云。竜廼屋大人門に入て狂哥を詠ズ。竜眼木園ト号し、千瑲ト云。浮世画森高雅子ニ学ビ、画名玉年」と見えている。仙果とは森高雅の同門で、狂歌活動においても交流がある。旅の目的は不明である。

餞別の詩歌を詠んでいるゐかひの再可、のだの□免坊（重ね書きのため一字判読できない）、かとうのせんじ、さとうの友直の四人のうち、□免坊については知る所がない。再可は、松洲こと藩士の「井カヒ（井飼か）瀬郎太」であろう。『よしなし言』五編の天保四年五月廿日付の一文に、「この頃厚田の文人墨客、予が師とし友とする人、松をなのるがいと〳〵おほし。士に松洲子」として、以下神主・法師・医師などの例をあげているが、松洲子に注記して右の名がある。和洲ならば、彼のもとに同好集った時のことを記す仙果自筆の『玉箒日記』一冊がある。今に伝存するかどうか不明であるが、

牽舟氏「家蔵名家自筆本の一部」（「ほんや」大正四年十月）によれば、表紙に「天保五年といふとし十日の日／はつねのけふの玉箒日記／同好はなし入り／古今堂千歌漫筆」とあるといい、内容は「この年正月九日友人松洲の許にて同好会合して戯れしことを記」したものという。せんじは「仙二」（十九日条）で、加藤仙二であろう。発句を寄せていることからすると、俳諧方面の人かもしれない。留守中の家のことをまかせており（同日条）、前述『おもひのまゝの日記補遺』の土産物の項にも、「加藤仙へ　浅くさ海苔十ひら」云々と見えているから、近所づきあいのある人物と思われるが、伝未詳である。残る友直は「佐藤の八弦（友直）れいのかたときさらぬ中なれバ、とやかくいひて、互にわかれがたし」（十九日条）と見えている熱田の親友である。『よしなし言』十二編所収の仙果自叙伝に、

あつたの大ミや御迁宮のとし（文政元年）、木下正三郎奉納の能、（二月二十三日より）三日あり。見物に行きし時、佐藤琴二（サトウキンジ）、近習の医師、のち甲太郎、今（嘉永四年夏頃）はりつはな御用医者也。此人市岡猛彦ぬしの門人にて、本居家の下筆執正なり。予と同席し、はじめて友となる。つねにゆきゝして（中略）ふる事まなびのたふとき事をもしりそめたるこそうれしけれ。

とある。この琴二が友直で、仙果が鈴木朖の門人となって国学を学ぶようになったのは、実に彼の影響である。友直は琴二、甲太郎以外に、俗称を益三（マスザウ）といい、榊園、真水、箏屋、八絃（ヤツヲ）、琴松、和松、錦翠の別号がある（『題作文稿』、再可の項引用の『よしなし言』の一文、『笠亭仙果文集』の仙果書入れ）。御用医者であるばかりでなく市岡猛彦に学んだだけあって、高階惟昌編『国学人物志』（安政六年刊）の尾張国の部に、「友直　熱田　佐藤早太郎（ママ）」と見えている。

次に紀行日記であるが、旅の概要は、天保三年三月十九日夜亥の亥過ぎに熱田を出立し、廿日御油の近江屋に泊、廿一日浜松江戸屋泊、廿二日大井川を越えて嶋田の大藪屋泊、廿三日興津吉田屋泊、廿四日初めて富士を見て三嶋の竹屋泊、廿五日箱根を越えて小田原の本陣清水屋泊、廿六日戸塚沢潟屋泊、廿七日川崎笹屋泊、廿八日江戸市中に入り、下谷御先手組屋敷内の種彦宅に到着、以上の十日間で、途中廿日から廿四日までの五日間は駕籠を利用している。要するに、熱田

から種彦宅へ直行した旅といってよい。

日別に二、三付言しておくと、十九日条に「中瀬のふる家なる庭の桜」云々とあるのは仙果の生家で、この当時は人に貸し、自らは親類上野氏の古宅を借りて住んでいる（自叙伝）。廿一、三、六日条に都路のことや京で会った人のことが見えているが、仙果は文政十一年三月に森高雅と京都嵐山へ花見に行っており（自叙伝）、同年八月にも佐藤友直と京都旅行に出かけている（『へだてぬ中の日記』）。廿七日条では、神奈川の旅籠長しま屋まで種彦が出迎える手筈だったことが見えている。都合がつかなかったのか来ていなかったが、種彦の方も会うのを楽しみにしていたのであろう。

自らの和歌や狂歌に古歌をまじえつつ記されたこの紀行日記は、当時の東海道の地理や風俗の資料としても価値があろうが、種彦宅の場所を知るうえでも参考となる。種彦が生後間もなくから天保六年九月に堀田原の修紫楼に転居するまで、五十余年間を下谷御徒町の御先手組屋敷内で暮したことはすでに知られている。しかし、その組屋敷内のどのあたりなのかについては言及がない。廿八日条の記述を、天保三年刊の御江戸大絵図（須原屋版）を参照しながら検証してみると、仙果は日本橋を渡ってから、その筋を今川橋を経て筋違御門まで北に直進し、ここで右に曲がり（仙果は北進時の右折を「南へ」と表現しているようである）、神田川南岸の柳原の土手づたいに進み、この川にかかる和泉橋を北へ渡ってさらに直進、「加藤遠江」の屋敷の北側を右に（仙果のいう「南へ」）曲がると、左手つまり北側に御先手組屋敷入口の総門がある。この組屋敷は南北に長い地形で、「惣門を入る。一ツのほそきほりをこえ、また北へ入る。さてなん、柳亭の翁のいへなりけり」と仙果は記している。天保三年版の大絵図には組屋敷内の様子が描かれていないので、いま少し後の嘉永四年刊下谷絵図（尾張屋版）を見るに、組屋敷の南から三分の一ほどの所に、東西に流れる細い堀がある。この堀は西方の不忍池から流れ出ている忍川である。つまり種彦の家は北側の残る三分の二に、南の総門から入れば、忍川を渡ってさらに奥に入ったところにあったことになる。

次に、この紀行日記からではわからない江戸滞在中の事跡について、知り得たことをまとめておく。

『馬琴日記』のこの年四月二十五日条に、「過日、田鶴丸状中ニ申来候、尾州の人仙果来訪、面謁を乞ふ。右同断ニ付（日記の前条により、多用のため病気を口実にしたこと指す）、不逢。近日、又可参よし申述、帰去」とある。初めて江戸表へ出るに際し、仙果は同じ熱田に住む、馬琴とは面識もある狂歌師の芦辺田鶴丸に、馬琴への紹介状を依頼していたのである。その紹介状が馬琴に届いたのは、四日前の二十一日だったことも『馬琴日記』に見えている。熱田を立って一月以上も経て紹介状が届いたのは、この頃の田鶴丸が、自らが庵主となっている祐学院の修復に多忙だった（市橋鐸氏『東海郷土文化史考』）からであろうか。結局いかにも馬琴らしい対応に仙果も再訪を告げたものの、ついに実行しなかったらしく、その後の『馬琴日記』に再訪の形跡は見当らない。『よしなし言』の記述類ではその四編に、この旅行時に種彦から聞いたと思われる書き留めが数条ある。蒲焼の食べ方や、高屋家では浅漬けの漬物を作らないことなどが記されている。また自叙伝には吉原見物に出かけたことが見えており、今回の旅の興津吉田屋での一件（廿三日条参照）にもふれている。自叙伝の執筆はこの旅から二十年近くも後のことであるから、吉田屋の一件はよほど印象に残ったのであろう。帰郷に際しては、この時江戸へ出ていた花山亭笑馬が高縄まで見送っている。二度目の江戸行の帰りを尾張で待ち請けた『東海道中滑稽譚』（前述）の口絵の賛に、「ひとゝせ朋友に別るゝとき　高縄に別れの酒をのミ過て日もやつ山にかゝりけるかな　笑馬」と見えている、その「ひとゝせ」は、この天保三年のことと思われる。

解題の最後として、この前後の頃の仙果の暮らしぶりと、種彦校訂合巻についてふれておく。

文政十一年に結婚した仙果に、この天保三年頃に長女きりが生まれている。後妻が天保十四年に没した時、きりは十余歳（自叙伝）というから、その時仮りに十二歳とすると天保三年の出生である。しかし今回の紀行日記に、その形跡はまったく見られない。翌四年頃には、庄屋役の他にいろいろ副業もやっていたようで、この年四月から執筆しはじめた『よしなし言』五編所収の自伝歌に、「役庄屋、業はあらひこ上絵書、たゞの画もかく戯作代作」といっている。天保六年になると経済的にかなり困ったらしく、秋冬の頃には中瀬町の生家の中に二対一に区切る壁を作り、三分の二の方を造り酒

屋に売り、自からは前述の借屋から狭い三分の一の方に移り住んでいる（自叙伝、『よしなし言』六編）。この年春の二度目の江戸行の折、関根正直氏『小説史稿』等が伝える潤筆料問題を引き起こしたのも、こうした経済状態と軌を一にしていよう。また平出鏗二郎氏が『鏗痴集』でふれるところの、江戸行に際して仙果が蔵書を平出順益に預けて借金したというのも、こうした背景があったからであろうが、少なくとも天保三年の時点ではそこまでには至っていない。恐らく天保七年の三度目の江戸行あたりからであろう。

種彦が校閲をした仙果の合巻のうちで、原本が確認できるのは次の諸作である（数字を○で囲った作は種彦序。年次は刊年でいずれも正月または春新板）。

①天保二年『合物端歌弾初』前後帙　八巻四冊　仙鶴堂
②同　三年『国字水滸伝』十編　四巻二冊　永寿堂　天寿堂
③同　三年『花街雀竹夜遊』前帙　四巻二冊　仙鶴堂
④同　四年『花街雀竹夜遊』後帙　六巻三冊　仙鶴堂
⑤同　四年『国字水滸伝』十一編　四巻二冊　松寿堂
⑥同　四年『国字水滸伝』十二編　四巻二冊　仙鶴堂
⑦同四年『肱笠雨小春空癖』前後帙　八巻四冊　仙鶴堂
⑧同五年『油町製本菜種黄表紙』　四巻二冊　仙鶴堂
⑨同五年『千代見草調富貴組』　四巻二冊　栄久堂
⑩同六年『枕琴夢之通路』　六巻三冊　仙鶴堂
⑪同七年『花蔭賤之俳優』　四巻二冊　永寿堂
⑫同八年『国字水滸伝』十四編　四巻二冊　仙鶴堂

今回の日記の前文に、「かしこの書賈甲乙に一種二種彫らせたり」とあるのは①②のことであろうし、「去年も亦二三種作り出てこそ送りしが」とあるのは、②③とそれらに続く④⑤あたりを指すのであろう（正月または春新板ということは執筆はその前年以前で、発売は刊行年前年の冬である）。天保三年までに執筆した作は種彦の添削を受けたが、翌年執筆分からは種彦もその必要をほとんど認めず（⑦の天保四年春付けの種彦序）、⑫を最後に、刊本から種彦校閲の表示がなくなる。こうした中で特に『国字水滸伝』については、六編までが書名「稗史水滸伝」で山東京山訳、七編より右に改題して種彦訳、それを駆け出しの仙果が書き継いだのであるから、さぞ鼻が高かったことであろう（右リストに見えない

十三編は種彦訳で、十五、十六編はまた仙果訳）。入門以前からこのあたりまでのことを、潤筆料などのことも含めて、仙果は『よしなし言』十一編（弘化二年春より執筆）の中で次のように記している。

おのれ戯作を好みて、十五六歳よりわけもなき事かきつらぬ。二十におよバずして泥鵬台文集刊行せり。これ愚作刊行のはじめ也。こゝにおいて、江戸板の合巻がかきたくなりぬ。牛はねがひから鼻をとほすといへり。実ニ然り。幸ありて下谷の翁の爰顧を得て、合物端歌弾初四冊、当時めづらしき美製也。かくて年来の願ひたりぬとおもふに、作をしてかねがほしくなりぬ。又師のとりたてにて、四冊、三分乃至一両の金をとり、つゞきものも、国字水滸伝を五六篇つゞけたり。名家の京山に続貂して、師の新案にまじへうられ、面目をほどこす云々

三　『ふしまちの日記』翻刻

凡　例

一、漢字は原則として通行のものに直したが、「燈」と「灯」は両用した。

一、明らかな誤字は正したが、それ以外は（ママ）を注記した。ただし仙果自筆本の文字が推定できそうな場合は、推定文字に「?」を付して（　）内に注記した。

一、ごくわずかな虫損があって、そのために文字を推定した場合は、推定文字を□で囲った。

一、句読点を私に加え、改行についても一部私に行ったが、濁点は原本通りである。

一、丁移りは、その末尾にあたるところに、（1オ）（1ウ）の如くに記した。なお、仙果自筆本にはなくて宍戸昌によって施されたと思われる朱線が二箇所、墨線と注記が各一箇所あるが、いずれも採らなかった。

一、一部に差別表現があるが、歴史資料の立場から、あえてそのままとした。

僕近き頃より、物本著る事を、江戸の柳亭種彦の翁に学ひ、常にせうそこかよハしつゝ、かしこの書賈甲乙に、一種二種彫らせたりけるを、去年も亦、二三種を作り出てこそおくりしか、一度ハ江戸の様も見よ、口親教諭てハえあるましきこともあんなるをとて、師よりいひおこざれたりけれハ、さらハとて、かくは俄におもひたちぬるになんありける。道の友ハ、御倉の官のつかさ人山本の某になん。既に出たつきはにして、小川の千瑞（チニヲ）しひてたのむにより、共につれゆかんとす。はつか一月二月はかりをふる旅なれと、わかれを惜ミにくるひとなきにしもあらす。人〻のうまのはなむけ、おくりの哥詩も、おほかたハはぶきつ（1オ）。

旅衣かへりてきかむ春霞関路へたてぬ初郭公　ゐかひ

の再可

かへし

郭公心へたてぬ中のもりかへりてきかむ初音もらすな

ミかへりの柳のいとにからむとも蓬か島の家路わする

な　のだの□免坊

笠亭仙果の江戸紀行

かへし

ミかへりの柳はよしや手折ともけふの別れをあにわすれめや

にしきゑにいざことゝハむ花盛り　かとうのせんし

これハいせものかたりの隅田川を思ひよせて、家つとの錦画に、江戸の花盛を問んと、あらかしめ待つ心のよしは、別文にミえたり。その文詞ハ略く。

かへし　家のこと何くれとかたらひおきていてたつなれは

ありやなしや君にまかせて江戸の花（1ウ）

いかはかり別れハをしきむさしのやかへりこん日の限あらすハ　さとうの友直

かへし

武蔵野といへハはるけし若草のはつかはかりの旅にハあれとも

天保三年ミつのえ辰のとし、三月十九日の夜出立へきに定たれハ、千瑞ハよひより来をり、佐藤の八弦（友直）、れいのかたときさらぬ中なれハ、とやかくいひて、互にわかれかた

し。中瀬のふる家なる庭の桜、今なんさかりなるを折らせて、しばしのほどのかたみにとて、

あめかせに後れて咲る桜花わがミはてぬをいかてうらみん

八弦かへし

此花を見すてゝ行も断りやかりのわかれの君にしあれハ

おのれ又

雪とちりよしやあくたにましるとも君だに花ともてはやさなん（2オ）

おなしくかへし

雪とちり芥にましる後迄も君かことはの花ハうつらし

亥の刻過る頃、山本某、新助といふに荷もたせつゝきたり、とく〳〵といそがしたつ。ゐかひの某、八弦、仙二、かずより、伊兵衛、さては弥兵衛、伊右衛門、三右衛門、忠右衛門、半右衛門なと、おくる所〻にてかへしやり、忠右衛門と三右衛門ハ、酒飯なともたせたれハ、夜あくるまておくらす。

はるけしとおもふはかりをおもひにてものおもひなきあつま路の旅

なれハ、こゑもたかやかに、うちきよくしつゝゆく。けふハそらくもり、雨ふりくらしたりしを、今なん漸晴行き、ふしまち月もきら〳〵と。ミちはよからす、春といへと、猶寒き夜也。笠寺、山王山、山本某ハ鳴海の宿の問屋をおこし、かごやとひてのり行。長き夜のころにはあらねと、よるの道ハうみつかるゝ（2ウ）ものにて、なかばはねふりつゝそあゆむめる。ありまつにて、

ありまつときけはうれしきほどもなくかへりもこましさきくてあれな

あなふるめいたるつたなうたや。界川もいつしか越へ、あひつま川あたりにて夜明たり。知立の出口、中村屋といへるにいり、いひたうべさけのむ。もたせ来りし三ツ角飯は、いと強しとて、たれもたうべず。こゝよりふたりの男もかへしつ。おのれかごにのる。

廿日、天けはれ、いとよけれと、朝のほどハ風ふきつ。大はまハ名物とてそばをうれと、うまくも見えねハ、見つゝ過ゆく。うとふ坂ハ小き坂也。とかくして矢作里へ来る。近きとし、洪水いてゝ家を壊し、人馬を害し、田畑こと〳〵くあれて、洲といふもの山の如くつもり、今はたもの植るわさもなしかたく、いとあさましうむね（3オ）つぶるさま也。溺死の人〻を供養せし法華宗の宝塔あり。他の

宗のもあり。柳堂（本願寺）開帳ありとて、挑灯軒にかゝけてあり。さて、橋のつめなる笹屋といふにやすらひて見れハ、橋杭ハたゞ目の前に有て、太き事物に似す。さなから鬼のつくはひたる如し。さて橋をわたりゆくに、げに〳〵長し。弐百八間とそいふなる。

矢作橋たちやすらひて詠れハむかひの岸ハ猶はるかなり

こゝよりうらの方の近ミちをゆけハ、八丁、松葉橋なとハミず。やかて岡崎の町へいる。いとよき家つくりにて、こまのつめなといふかぢあり。つむをつくることおひたゝし。かぢの家いくらも並ありて、槌の音いとかしまし。町の数六十余、まちの地勢ハ廿七曲なりとぞ。まかりめ〳〵、辻なとに、秋葉の山（3ウ）へ奉る燈籠いかめしう、おとろ〳〵しうつくりて建たり。いせの御神を新たに祭りたる所もあり。こハ、おかげまゐりの頃に、あま区だりまし〳〵たる御祓を納めたる所にや。俳優の芝居もあり。町の口に看板いだせり。城下ながら、外題の文字など墨うすく、細やかにてくちをしけり。岡崎の出口を、投（ナグリ）の丁（マチ）といふ。これより藤川まて一里もあるへし。知立より岡崎まてハ、多くは小松林にて、左も右もひろやかなる野也。こゝよりハやゝ山もちかくなりぬ。大平川は三大河の一ツにて、げにひろし。かんばさきといふあたりより、右の方に万燈山といふ、木どもしげりたる山あり。雲母をいだすとそ。藤川をこゆれハ、頓て八幡宮のミやしろあり。舞木（舞上とも云）といふ所也。東照宮の御身隠しましたりし旧跡などありて、ひろくたふとき宮居なりとぞ。山中の里より法蔵寺村まてハ、早縄、芋（4オ）のひも、あみ袋の類を売る家おほかり。宮路山といふ名所ハこのあたりとか、貝原ハいはれき。宮路山をこえすくるほどに赤坂のよし、光行の記にもかゝれたり。元宿は昔の赤阪（ママ）なれは、このあたりなるべし。

なにしおはゝわかふるさとの見えもせんのほらまほしき

宮路山かな

かごにのりてきにけれハ、岡崎よりかちにてゆけどもいとはやく、われのミひとりさきになりぬ。

なけやなけおくれし友を呼子鳥ひとり過行山中の里

法蔵寺（浄土）へまうづ。二村山といへる山号あれと、名所のハこゝにハあらじ。猶西の方にやとおぼし。此てらも、神君のさうしかけ給ひしといふ松、硯の水といふものなどあり。その水ハ石坂の下にあり、文化元年四月十七日江戸井出政永のたてられし碑あり（4ウ）。

武尊過此感霊泉生官軍止渇事于東征
神君学字硯水日清大哉坎徳存賀勝名

このてらの門の辺のしたり桜さきミたれたり。時ならねば、めつらかにおぼゆ。

はや縄によりてや春をつなげかしこのおほてらにさく糸桜

こハ戯れの歌也。長沢といふは、並木を二ツへだてゝ、げにながきむら也。赤坂へ来るに、むかしも今もうかれづまの名ある所なれど、発心の媒となるへきはかりの女ハ、ふとも見あたらす。五井へハたゝ十六町の所にて、短きなハて一ツこゆるのみ也。日はなほくれ果ねど、ごゆのあふミやといふへやどる。店にてハ、こまものなどあきなふめり。きたなげなき家也。つれ〳〵にこそおハすらめとて、女どもの、ふるきくささうしもちいでたるを、あるしのおきな、あな（5オ）見ぐるし、猥かハしきものをといひて、とりかくすこそつきなけれ。こハ、司人といふものハ、聊のあやまちをもとかめて、事あれかしとおもふ人あるものなれハ、かくあハてかくせるなめり。わらひ本なといふにハあらぬを。

廿一日、日出るころ宿りをいづ。国府（三河のこふ也）といふ所、よき家あり。小田ぶち縄手といふあり。俗おたぶつなハてといふ、こゝ歟。唐の俗語につひに死にたる事を、嗚呼哀哉といへるに似たる心ばえの俗語也。桜町といふは、並木の松の間に、桜の木どもまじりて咲たり。中納言のおはしまさハ、松にあえよと泰山府君をや祈り給ふまし。茶屋町に、りやうかうさんとかいふ茶うる店あり。朝寝したるにや、今戸なとあくるめり。よし田の入口の大川ハ、豊川といふにて、橋は百二十間ありとなん。滝川の末にて、海へちかく、いせのあたりへ出る船おほく、船宿の（5ウ）ならひたり。こゝも城下なれハ、家居つき〳〵し。いろあるくゞつも見ゆれとも、いてや二階よりまねくさまもなく、たばこのまぬ身ハ、名高きほくちもほしからす。たゞ過に過行。二川まて一里余りの間、左りハ山近くそひえ、右に松林ひろく、海遠からす。火打坂といふあり。尉姥といふ石あり。たいまつ峠といふもこのあたりにて、山高うものすごくおほゆ。大なる岩をつみあけたる山おほく、都路にていはゞ、一の瀬、筆捨のあたりに似たり。このあたりにて、

火打さかよしだほくちもむやく也よるもまよわしたいまつ嶺

といふ。あなつたなの狂哥やと、おの〳〵わらふ。まことや石巻山といふもありき。式内の神のミやしろあるよし也。右には、いわや観音への道あり。此山の峰に、銅仏の観音立給へり。遠くよりよく見ゆ。二タ川より白菅までハ家（6オ）居もなく、化物塚とかいふ所に、小家三四軒もあり。さりなから、松の並木ハよそよりもうつくしげにて、見所あり。こゝハかこにのりて行。しらすかの入口に、猿かばんハといふあり。木曽路にも同し名あり。こゝにても柏餅をうる也。猿か馬場ならんを、茶店のかんばんに、猿か姥とかけるハ、いはれなき事とも也。白すかの出口にて、鰯二ッを八文にてかひ、いひたうべつるを、あとよりつれのもの二人きて、今なん生鰯を十ヲ十二文にて買しが、いとやすからすやとて、ほこりかにいふに、さてはおのれのハいと〳〵たかかりしとて、くやしかれとすべもなし。汐見坂より南をみれハ、下へつらなる山〻やう〳〵低く、長くもまろくもけたにも、さま〳〵のかたちをして、あるハくほみ、あるハめぐり、松、さならぬ木ども、たみの家（6ウ）居、山畑、何も〳〵たゝ一寸二寸はかりにミえて、さて、はてハいと〳〵ひろくおほきやかに、目のおよぶかぎりハ海にて、かの遠江灘といふ所也。江戸へかよふ大船も、たゝ木の葉のちりたる如く、物はかなくミゆ。かゝるおもしろきけしきハ多くもあらす。ふじみの松といふあるに、かの山もやゝめをとゞむれと、霞にかくれてかひなし。

かくてまたふじの高根の見えもせは汐見坂にてけふくらさん

しばらくハたちゐたり。とふげのくわん音堂有。海上目当の常燈明といふハ、六角のかたちにて、あかくぬりたる也。この坂をくたり尽せハ、漁家少しありて、海ばたへいとちかし。鰯多くとれたりとて、老たるもわかきも、女もこどもも、をけかごなともちて、もらひにとていそぎゆく。いはし（7オ）を洗ひ、撰りなどする家もあり。十ヲいくらととへハ、八文ばかりにこそといふ。又山本、ちゆらなとハかふめり。海へ出て見てあれハ、まさごぢもひろく、海ハむかふも左も右りもかきりなくひろく、風のなきたる日しも、波は、おとろ〳〵しくなきさへもよせて、かもめのむらかりあそふさま、いかなるつよき筆のゑしにかゝせたりとも、よわ〳〵しくなりて、かきおとりすへくおほゆ。例の大船、いとちいさく見ゆ。

たちさわく鳥のつばさにかくろひて沖行ふねのミえみミ

えずみ

げに鰯の網二所三所へよりて、鍬もてかきいだし、礒べにつみあけつゝならべ、人にもおほくやる。すべてこの魚をつみおける所、小山の如くて、いく所にもあり。しほかぜハたゞこのかほりになりて、いふせけれは（7ウ）、さらハとてもとの道へいで、元白すかをゆくに、いやしきものゝ子ども、八文〳〵とのみいひて、わらじをつきつけ〳〵うる。かくてあらゐへつき、このつかさの下、かつさ平吉とかいふハ、山本某のしる人なれハ、よひ出して船の事かたらふ。名物といへハうなぎやかせて、いひたうべさけのみ、さて船にのり、今切をわたる。天気いとよく、波もしつけく、風すこしありて、よき追手也。北は湖のあとなれと、ひろくてはてもミへす。我あつたの渡海のこゝちす。半道ばかりあなたより舞坂のきしまで、土手といふものゝことものを大きくつくり、二つらにきづき、大なるくいもて水をせき、松をうゑ、岩をくみて、中を川のことくしたれハ、あらき波つよき風にもあやまちなし。かくなりしハ宝永（8オ）の頃にて、いとたふときおほやけのミめくみになん。舞坂へあがり、ひたもの行に、足いたくつかれて、日もくれぬべく、心いたうくしたり。蓮池といふか道の右にあんなるを、六七丁の長さもあるべきが、十丁も十五丁もあるやうにおほえたり。わかはやし、鳥居なハてなとをゆく時は、夕闇にてまくろになりたるを、たどり〳〵、うめき〳〵浜松へつき、江戸屋といふにいる。よき家ならねと、兄弟のむすめ、さすかにきよけなるが、いとねんころに物するにそ、心もなくさみてうちふしぬ。かのいわしやかせたれと、魚にもあきて、たゝけしきはかりおの〳〵くひつ。

たひ衣にほハせもせてあちきなく心ひくまののへのはり

原

廿二日、一里ばかり行て日いづ。こゝハ長田（ナガタ）の松原といふ。むかふを見れハ、出る（8ウ）につぎて、あかきものひらめくを、ちかづきミれハ、大なる升だこにて、鶴の画をしろくゑり出て、べにもて染たる色、物に似ずうつくし。すべてミかハ、とほつあふみ、するが、いつこも〳〵、たこをもてあそふ事いとおほし。うる家も少なからす。制も拙からす。升と□のかたちのいとおほく、あふき、あむなとハなし。わさをきの役者のかほ、武者絵なと、絵も拙からす。せんじすハうをもちふる事、はた上手にて、いろうるはし。さてこのつるのたこをあけゐたる

所ハ、橋場といふ所也。薬師新田にて休ミ、かやん場を過ク。俗はあんまといふ。この方、人よくしれり。中の町といふ所ハ、京と江戸の半にあたるとぞいふなる。天竜川ハ二筋あり。西のを大天竜とて、いとひろし。ともにいとはやき川なり。川のはゞハ十町もあるへし（9オ）

さかのほり又さしくたすわたしふね瀬はやき水をさをにくたさて

池田にゆやの墓あり。よりて見ず。近みちより見付へゆく。山二ツこゆる也。一言坂、一言むらなといふ所あり。見付ハいとよき家づくり也。台よりみれと、猶ふじハ見えす。今切にてもうちなげきしを、中〳〵くもれ（元政法師の哥、よしさらハ中〳〵くもれことのはのみてもおよハし冨士の高根は）なと、まけしごゝろにいひつゝ、袋井よりかごにのる。かけ川へいたる見付との間に、ミかの坂といふ山みちあり。ミかの川といふもあり。五色山といふ山もあり。袋井のあたたに、くつべ、なぐりなとにては、うきよごさとて、紋あるむしろを、わかき女どち織いたしてうる。おるさま、めつらかにらうたし。小池といふにハ、穢多五十軒はかりあり。さうり、金剛なとにならべてあり。場（ハマ）とはなをのはつをつくりて、江戸へおくるとぞ。かけ川いりくちに、十九首川といふ（9ウ）あり。何の意か解けず。この城下ハ葛布名高し。問屋いかめしき店あり。さてはあゐざめ、さしたびなどもうる。出口に一ツの庵あり。はかなき垣根にそひて、若木の桜二本三本、葉かくれに一ふさつゝ、枝おもげに花さきたる、いミしうをかし。この庵にて、女の声して歌うたひ、三弦ひく。しらべ急にて、三下りなどにや、同しふしを、くりかへし〳〵、いきもつかずうたふが、物あハれにきこゆ。しやうかもひなひたれと、にくげなき文章なり。うたいはつるをまちて入て、何なる哥そととひたれハ、江尻の人とめ女の、さる人とともに死したるを種にて作りたるはやり小哥のよし、いへり。

おもほへぬ涙を袖にかけ川やよそのうきせをおもひやりつゝ

西坂の入口あたりに、ことのまゝの明神ましますよしは、古き日記ともに見え（10オ）たれハ、いつれぞなととへど、里人もしらすと。しられぬものを、さのミきゝけんといはれんもをこ也とて、むなしくすぐ。西坂は、宿のいりくちより坂ミちにして、家居も、地勢にしたかひて建たり。かなやまて二里はかりのほど、けはしき山路にて、ミちはひろくてよけれと、いきあへぎて、あゆみぐるし。か

の西行の法師の、命なりけるもよまれし所なり。

さゝんざのはままついて丶今そゆくこのさゝのはのさや

の中山

阿仏尼の日記にもあるごとく、心細くあハれなる山越にて、見所なし。すこし行と、よなき石といふ丸き石に、あみたふつの六字ゑりたるか、まろばしあり。いときたなけにこちなし。これをもえせものは、石刻にすめり。墨にて汚れたり。こそたてのくわんおん、名物の水飴も、かの孕女のころされしといふも（10ウ）のかたりにより、まうけたるものとおぼゆ。あハがたけは、かのむけんのかねのある山なり。遠目かねあれはのぞく。かたはらの人、あの杉のしけりたる、こふかきミねが観音堂、一本えたをたれたるかかねかけ松ぞとをしふるなと、まねばんもえうなし。

てうぢ〳〵あハ丶かたけの麓とてこをそたてたるミほとけもあり

とは、たはふれなり。まことや、かの孕女の事かきたる縁起やうのもの、所〻にてうる。峠に、かのあめうる家いくらもありて、わかき女どもよそほひたて丶、いろあるきぬきつ丶、人だにとほれハ、あめをもちにつ丶むまねして、あめのもちかひな引とよひたつる声、いとかしまし。いつれの女もミにくからす。宿屋の婢、茶屋の女どもとハこよなく、人の娘めき品たかきもあんなるに、ちゆらハたちよりやすらゐて、なにしか人をなど古今、東路のさやの中山中〳〵にずなにしか人をおもひそめけん　んじつ丶（11オ）、かへりみかちにゆくめり。又かのあハがたけは、式内の御神まし〳〵たる所なり。むけんのかねなと、けかれたる名のみ高くなりしハ、いとなけかはし。さて峠をくたりゆけハ、菊川といふ所、宗行の君の事おもへは、けにくちをし。金谷坂よりミれハ、谷間より金谷の宿、大井川よくミえて、いとよきけしき也。日かたふきぬれハ、いそきくたりて、大井川へゆく。川役所にて銭いだし、割符をとり、川岸へゆく。九十四文川にて、水あさからす。二人を連台にて、六人かゝりてわたすとなん。川原をゆくほと、いとはるか也。まさごにはあらで、大なる石ともなれハ、足いといたし。水の流レいくすぢもありて、十間十五間、又七間八間のもありて、かりはしかけたり。からうじて河きしへのぞむに、川こしごやのかゞり火のほかけも物すごく、小山のことき大男、ぬれたるみをあふり、酒などたべ（11ウ）ゐたるさま、遠きよりきぬる女ともは、げにおそろしくこそおもふらめ。はやう〳〵ともよほすに、いさとて、連台もちいづ。はしごの大なるやうの

ものにて、あからさまなる台なれハ、あやふさかきりなく、日もくれてくらし。水は深くはやく、白くにごりて、いつれも〳〵心おたやかならす。千瑨とふたり、あしくみ合ひて、ミを縮めをるぞ、えいとかきあげてをどりいり、こゑいさましくよひつれて、たかくさしあけ、左右へふりて、拍子よくあゆみもてゆくに、あやふさもわすれ、とともにイヤ〳〵といはまほし。いさゝかあやまちなくこえて、又橋ともいくらもわたり、六軒や八軒やなどすき行ク に、ミちあしく、くらくて、例のたどり〳〵、しまだの大やぶやといふにつきぬ。川もやすくこえぬるよしを、国へせうそこしてつげやる（12オ）。

廿三日、やとより藤枝まてかごにのる。とち山、道悦むら、青しま、せど、しだなど、いろ〳〵のむらありて、せと川なり。水まさりて、かちごし也。かごにのりたれハ、人ふたりして、かごをてにさゝげてわたる。かごかきはかちわたり也。藤枝より、水もり、又鬼島、あさひな川、よこうち村なといふ所あり。岡部の宿をいで、やう〳〵山道也。長願寺坂、十石坂なといふ所あり。ゆやごんげんのましますとかいふあたりより、山をのほること、いと〳〵さかし。こゝハ、かのうつの山越になんありける。けにこのあたりへくるまで、ふるさと人にハひとりたにあハず。されとも心細きミちもなけれハ、旅のこゝちもせて日をかさねゆくも、ゆたかなる御代のめくみなりけり。たふけに地蔵堂あり。このしたに、いさゝかのよしすもてかこひたるやすらひ所、ひとゝころありて、かためしひたる、むそぢばかりのうバ、団子、いもなどくしに（12ウ）さし、あぶりてうりをり。やすらひて、砂糖の醤油のと、とりくらひ、茶くみつゝ、のみにのむに、うバ打わらひて、いかふ君たちハ西のくにの人と見ゆるを、よにたやすげなるものゝくひやうかな。すべてかみかたの人ハ、一戔二銭をもかる〳〵しくはつひやさず。さいつころ、この所へ四人つれたる旅人きつ。詞づかひ、京人とおほゆ。わするばかりやすらひゐてからして、団子一くしかひ、壱ッツ、わけて四人してくひ尽し、茶をいくらともなくのむ。さてなん、銭四文置ていなんとせしかバ、あまりにくさに、やよたびのとのたち、うバが茶は、一桶の水も麓よりはこべハ、たゞのまれては、すぎハひなりがたし。おほくともいはじ、一人前四文ツ、給へ。さらずハ、得こそたゝせしとて、つひに十六文の茶代をなんとりたりし。然れとも、物になひ、馬ひくくもすけをのこにハ、いつも〳〵、茶にまれ水にま

れ、ほ（13オ）どこしてをしとハおもハす。かれハ、そのやふさかなりしをにくみてなり。君たちのくひざまを見れハ、さる人とハいとこよなしと、たわふれつゝいふに、いな〳〵ものはたうべても、銭はすくなくおくまらうどにこそ、といへハ、さやうにつミなくものゝたまふ人は、我好む所なり。などか物をしみせん、などいふ。あきなひ上手のうバの君やとわらふ。またいふ、君たちのごとく、あさればみてあるき給ハ、、やとり〳〵にて出をんなを、ことさらにやすゝむべき。こよひハえじりか、おきつか。おきつは、うるさくしひ、すゝむるならハしなり、などいふ。銭なしと見てや、かへともいはず、中〳〵に心安しなといひて、こゝをたちいづ。うバ猶いふ、おのれハをつとに早うわかれて、久しくやもめ也。孫ははべり。麓にて、松や忠八となんいへる。よりてゆるやかにやすらひ給へ、といひしを、しらずてこそ（13ウ）うち過しか、十団子はかへり。ずゝのごとく、十ヲツ、糸に貫たるもの也。これより切通し、河原、矢の沢、あかめが谷、二間やなといふあたりハ、道いとひろき所はあれと、山深きこゝちして、水も清く、こゝろすみて、さひしきあたり也。丸子ばしよりすこしおくに、柴屋軒宗長法師のあとあれと、よらず。まりこへ入ル。池田やといふ茶見せ、家もひろくきよけ也。入てこしうちかくるに、杉の木の文台に、桐の木の硯箱、たくさくばこ一ツおき、筆もあり、墨もあり。うつくしく表紙つけたる、法帖めくものならへて、はしちかういたしあり。ひらき見るに、諸国の人の書画、うた、発句、さま〳〵かきあり。こは宇治の大納言の、四方の物語をきかせ給ひしに似て、来つとふ人〻のことのはを乞はましとのわざ也けり。千ゆらもおのれも、哥一ツつゝかきつ。心ありげなるあるしなれハ、たい（14オ）めんせまほしけれど、道をいそきければ、いたつらにぞ過ぬる。とかくして、あべ川也。こなたのかたを、手ごしといふ。むかしは、千寿なといふ遊君ありし宿也かし。あべ川も水深し。こゝはかたくるまにのりてこえつ。水おほけれバ、大井川にいくらもせまきこゝろもせす。川をわたれハ、府中也。川ばたの茶屋を、みろくといふ。名物のもちくひ、やすむ。府中のまちハ、よろづ江戸を学ひたるさま也。いかめしき事、東海道第一なるへし。かこざいく、くわの木ざいくうるミせ、つき〴〵しうよき家かまへ也。京にてものいひし、とさや久七の家もよきいへ也。狐がさきハ、かちハらのいたばらのあと也。くさなぎにハ、わか大御神の、野火かへし

給ひしのちにまつりたる御やしろあり。この時よりくさなぎといふ名ありとぞ。やい津は海辺にて、府中より三里もありとなん。江尻（14ウ）より海いと近くなる。かごにのりけるが、あしきかごにて、右りへかたむき、くびもこしもいたうおほゆ。このあたりを、うどの浜といふとぞ。ミほの松原かすミてミゆ。

うとはまにうと〳〵しくもたちこむるかすみをうしとミほの松ばら

けふは、ひと日くもりにたるを、今なんさむけなる風ふきいてゝ、雨もふりぬべし。浪のおと、たう〳〵と沖よりひゝきて、物すこし。きよみでらも、かごにあれはよそに見て、日まだくれはてぬ頃、おき津のよし田やといふにやとる。おくにはなれたる坐敷ありて、海ハたゝめのまへにミえ、いとけしきよく、きよけなるやどり也。この間はいと高くつくりたれは、たかどのめいたり。いひのうつは、いをのあぢも、いとよし。給仕する女、よくもあらねど、なまめきて見ゆ。巾広き帯して、あかきえりのうらかへしたるさまなど、おもふに、かのくゞつなりけり。そら（15オ）おそろしくて、物をもいはねど、山本もちゆらも、さま〳〵あされかハす。おのれ、はたなんでうことかあらんと、つゐにハうちとけて、うきよかたりするほと、よるのものもち来る。いさね給へとて、いぬめり。山本ハ早〳〵ねふりて、大なるひゝきのおと、沖のなるにうちあハせて、おとろ〳〵し。雨さへふりいでゝ、しづかなる夜になりにけり。とはかりありて、かの女、おのれとちゆらの間へ入て、うちつけわさにははんべれと、こよひハいかでわか身あかなひて給へといふ。ねふりたるさますれと、耳ひき、肩引うごかし、さま〳〵いふ。いな〳〵といなめど、いかでゆるすべき。きみたちとねまほしくて、よひよりおほへ、かたハらをもはなれざりき。今なん空しくかへりては、家のものへも面むけがたし。しこめのきたなきを、まげて御かたわらに一夜あかさせ給へなと、さま〳〵（いや？）つひつゝけたるす（はゝ？）、けにおにかみも（15ウ）あらだつましき詞つかひ也。おのれはえたへで、そとはづして、板縁のかたへすべりいづ。しばらくありて、おのれを尋ね来てもとめいだし、あの君も、君だに、をとのたまハヾ、いなふねのとのたまふものを、いとつれなしと怨しかほ。にくさけにおほえても、しかりちらすべくあらす。おんみのいふ所理なれと、山本某といふハ、わが主人も同し人なるを、かなたよりゆるしもなきに、心ありてもすべなきを、といへは、

いなとよ宵のほど、われハ司人ゆゑ、さる事けつしてなしえがたし。ふたりハわかくて、何のさわりもなき人なり。あかなふべしとこそのたまひしか、かこつけをいはで、をとのたまへ。今さらかへりては、実に人の前面なきのみか、あるしのいたくのゝしり、たしなめはべらんもかなしくなん。さやうのまめことのたまふハ、にあハしからず。やよミやひを、とて、ほと〳〵いたき（16オ）つきなんずおほゆ。あやしき香のしたるかけ香のかほる、わさとかなしうひゝらかすも、いと〳〵にくし。かゝれど、のがるへきすべもなく、かつハ旅のたはふれに、いでやこの女を千瑣にいだかせ、おのれハ今ひとりよびてまし。この女にはまさるとも、おとりたるハあらし、とおもひなりて、さらバおんミのかほをたてすもあらし。さらハわれも一人あかなひてん。一夜づまは、おんみのごとき情ふかきは、中〳〵におもひのたねなり。としわかくて、心さまのおほらかに、世心もつかぬさまなるこそよけれ。よひて給へ、といひて、こゝをさり、千ゆらにかう〳〵といへハ、いかゝハせんにか（ママ）しらかゝへて、（ママ）たり。さらハとて、かの女、もやのかたへよるのもの引すりゆきて、さるまうけしつ。しはらくして、わか女のきたるを見るに、けにとしは十五はかりにや、はか〳〵しくものもいはす、つゐ居てうつふきをり。引（16ウ）よせてかほミるに、はしめのには、まさりてとるところもなきつらつき、いつこも〳〵らうたしとおもふあたりはなかりけり。こえふとりて、いと〳〵あたゝけ也。さむけなる夜は、中〳〵ほとほりてねむられもせす。ものこそいはねとおもひしか、やう〳〵あされば、うちいだして、今はやるといふ哥とも、かたみにうたひかハしめてきようずるも、こちなく、にくさげ也。さりともとおもふ心もむしの音も、とうちうめかる。ちゆらハ、はしめいなひしにハ似す、むつましけの物かたりするも、ねたさかきりなし。おのれもまけしこゝろに、あかぬかほもせす、はかなきことゞもいひかハすも、むげにおろかしうや。見る人あらハ、あさみわらハん。わかきハ、あしくてもうつくしくらうたきものなれバ、千ゆらのよりハあしくハあらじとおもひしを、かへす〳〵くやしくおもえと、かひなし。はやくねふりて、起せともおきぬがなほうれし（17オ）かりけり。かゝる女に、うるさくまつはされたらましかバ、いかに人のわろくやあらん。夜あけて、千ゆらがのハ、やかてたちいで、夕の如く、いひかひとりなどするを、おのれがのハ、もとの所にうまいねして、よりもこ

ぬこそうれしけれ。十文字やのきぬとかいへり。いろともなしにと、わがこゝろながらあやしけれど、まことにすべなし。千ゆらハしのひ目してにらまへ、おのれよりいてゝおのれにかへるといひしもことわりにおぼゆ。阿仏尼の哥をおもひ出てゝ、

なほさりに見るめはかりをかり枕むすひおきつと待つなうかれめ

廿四日、雨やみ、そらはれぬ。けさもくらきよりたちいづ。おき津川もかちわたり、わたしもりのせにおはれてわたる。程なく薩埵山なり。昔ハ海のへりをつたひし故、親しらす子しらすなといふをこそとほりしか、今ハ山のうへをゆけハ、道（17ウ）けハしきのみにて、おそろしくはあらす。されと雨のなこりに、土なめらかにて、足のふミどあやふし。八幡平とかいふ峠にもなりぬれハ、日高うなりて、海の面きら〳〵と、波の花匂ふか如し。三保の松はらも、いつしかとほくなり、久能の山もおほろ〳〵也。あしから山、やへ山、いつのミさきなと、むかひに見えて、ふじの山もかしこにこそといへと、霞こめて、猶わかたす。はら、よしハらの宿、並木なとちいさくミえて、山といひ海といひ、かゝる詠もまた汐見坂のあら〳〵しきには、こよなくえんにおもしろく、はたひか〳〵として、いはんかたなし。

くもはるゝさちだのミねの朝ほらけいつこかふじと見やる海づら

やう〳〵霞もうすらぎ、まづかの裾野ハ、むかふに遠くて顕れたる。末にいたるまてつゝきたるが、長しとも長し（18オ）。

ふしの山裾野をみてもいはんすべせんすへしらすおとろかれけり

山一里打こし、くらさわ、今宿、ゆゐ川をわたり、油井の宿。くらさはにては、紙をすく。たはこも名物なり。ゆゐより蒲原へハ、家居つゞきて、三十丁はかりあり。ともに右ハ海のへりにて、田子のうらといふは、このあたりをすべていふなるへし。しほがま、いくらも〳〵ならひ居て、海士のあハびをとるもある、なかめ多き所なりけれど、ふしの山のかた、みつゝゆくに、かんざわあたりにて、ミねのこらすあらハれたり。おもへハ〳〵、大きにも、高くもあるものかな。

あな〳〵とてうち見めてゝ白雲のはれ行そらにあふたふしのね

こゝろあてのそらよりはるか冨士のねハ雲ゐに高くあらハれにけり

うは玉の夢にミるたに寿きし冨士か根仰くけふのうれしさ（18ウ）

あしから、箱根の山こも、くらべては、たゝちいさきはやま也。

あしたかのけはしきミねも麓にてくもゐにちかくたてるふしのね

なと、ミたりこといひつゝ、かんばらも、七なん坂もすきて、ふじ川へ来る。川ひろく、水の早き事、天竜にもまたいたくまさりたり。船も大やかに、いと深うつくりたり。中市場とかいふ処ハ、ことによくふじを見るあたり也。つる芝なといふものも、こゝよりよく見ゆ。よし原を過れハ、いよ〳〵ちかく、裾野ものこりなく見え、けしきいはんかたもなきに、あやにく雲のたちまふそ、あかぬ事なりける。

おなしくはすそのゝ山を立かくし高ねハのこせふしのしらくも

冨士の山ひえのはたちといひつるハくもより上のミねのみや見し（19オ）

ひえハ五十丁のほる。こハ九里半のほれは、おほかた二十はかりにてハたかはねど、かくいふハ、山のかたちの大なるをほめて也。かくいふほどに、おほかた山はかくれはてぬ。原まて三里六丁といへと、一ツのまかりもなき並木の松原にて、他ハいさご高く、おもしろき道なから、ふじのおもふさまに見えぬさへくちをしく、いとつかれにけれハ、みちとほくおほゆ。うきしまか原、冨士の沼、いとひろきもの也。はらより沼津まて、大かた家つゝきて、間〳〵に小松の並木、少しつゝあり。家ハ、かならす前に高垣ゆひて、家あからさまに見せす。大すか(?)、小すか(?)、東かまど、西かまどなといふあたり也。沼津の城下、宿のあたりやけて、今家たつるもなか也。こゝよりかごにのる。きせ川に、かめ、つるのあとあり。ふじ見にて、折もよくふじ見ゆ。夕くれになりぬ（19ウ）。

雲間より朝日にミえしふしかねを夕へのそらに見るもうれしな

かつ〳〵に霞もはれて春のくれくまなく見えつふしのたかねは

ミしまの宿もやけたり。はこね山をまへに見て、かごに入たる旅雀、竹屋といふにやとりけり。まことやよんべ、山

本てる〳〵ほうしをつくりていのりしか、こよひ、かた袖つくりたして、ミき奉り、ぬかづく。女ども、見つゝわらふ。おのれかミゆふ。小いてふにこそ、などいひし。此かみゆひ、はいかいのほくの事なとかたる。又この家は、よくもあらねと、庭にやり水ありて、たへす流るゝこそきよげ也しか。

廿五日、てけいとよし。ほのぐらきにたつ。ミしまの明神、御前をとほりかてらにはいし、宿少しはなれて、見川橋と今一ツのはしこえて、やう〳〵（20オ）坂ミち也。今井宿といふがいりくち也。いとよき草鞋をうる。あたひハ、五十銭六十銭もすめり。船くほ、つかはら、うすころばし、一の山、このあたりより、冨士の山よく見えたり。すりたる山の間より、ミねのみぞ見ゆる。さて法花坂、大しくれだに、小しくれ谷なといふ処もあり。つかはら、一の山も立場也。ミつやも立場也。さゝはらも立場也。下長坂、上長坂、さて山中の立場、こゝまて三しまより二里とぞいふなる。このすこしあとに、冨士見平といふあり。小かれ木、大かれ木、下のくぼ、石わり、甲石の立場は、家なし。ばゝか平、風こし、このあたりに境木とて、いつ、さがミのさかひのしるしたちてあり。これよりゆく〳〵下り坂にて、たうげの宿なり。いでやこのあハひ、三里廿八丁とか。はじめハミちひろく、並木の松つねの如くありて、ミちもさすかに坂にして（20ウ）平ならす。のちには、杉の木だちものふかく、みちもほそくなり、いよ〳〵急なる道のみにて、はては、しもとばらになり、境木のあたりは、又ひろ〳〵とはれて、木ともなく草ともなく、しばくさしけりたる間に、いしをころかしたるみち也。すべて道なるに、火打いしのこときすかたしたる、角おほき石の、一尺も二尺もあんなるを、あじかなとよりうちあけたらんごとく、ミたりかハしく並へたるを、そのうへをとほりゆくものなれハ、あしいといたし。それをしもたかくのほりゆく。いとつらうかなしく、いと〳〵こうじにたり。馬のあとなと、一尺はかりもくほみてあり。石にのりては、なだれ〳〵するかゆゑ也。さしもいさめる馬も、たゝありのはふごとくしてゆく也。入口より一里もゆきてよめる。

たきすてし箱根の山のかゝり火におもひやしるきあかつきのみち（21オ）

つとめてこえし人のあと、いかなりけんとおもひやらるゝ也。甲いしのあたりの一里つかのかたハらに、永代人馬施行所与兵衛拝借地とかけるはしらをたてゝ、小屋有りて、

往来の人馬をのみの、いこひ所とするがあり。かなたのすくも川の東にもあり。大豆三合五勺にこぬかまじへて、湯にたてゝ、馬にほとこすとぞ。江戸呉服町のいせや与兵衛といふものゝよし。よきわざをこそすれと、ありかたくおほゆ。はゞか平にて、かごをかきて行をのこ猶わかきか、おのれにむかひ、とハすがたりして、やつかれも、むかしはおんば日傘にてそたちたるを、酒といろとにかくなりはてぬ、といひて、哥よむ。

鶯のきよくさへづる箱根山うれしいけふの扨ひよりかな

といひて、さて、哥うたふことも上手にはべりとて、わが故郷にてうたふとゞいつ（21ウ）のふしにて、なけやりうたひつゝ、いそき行。物かたりせんとおもひしを、あしはやくて、おくれにたり。

さかしくもわすれてもこし箱根山うたともたちのうくひすの春

に、といひしを、よひかけいはんもこと〳〵しやとて、やミつ。さて峠へゆけバ、女ども群集り居て左右により、袖ひきつゑとりて、休め〳〵といふ。さる家へ引いれられて、あな〳〵とわびたるもをかし。手かたくとりてはなたぬは、いたくこうじつゝ、さま〳〵たばかりてにげいで、さて御関所もさはりなくこゆ。湖の岸つたひ行に、さいのかわらといふ所、石塔おほくたち、いしのほとけ、あかゝねのほとけ、いくらもあり。虫はみ、くちたる堂三ツもあり。往来の旅人を見かけて、あるしの法師かねうちならし、経よむ。こんけんのやしろへ行みち（22オ）、とりゑたてり。権現坂、のぼることいとけわしく、八丁原はたひらか也。さてやう〳〵くたり坂なれと、いと〳〵さかしくて、中〳〵にあしつかれて、あやふし。例の石は、角たちておそろしく、うちちらしあり。白水、老が平、てうし口、さるすべり、かしの木、さいかち坂なといふをこえて、畑の立場也。これまでいと〳〵さがし。畑ハよき家居也。女ども、山中なれどミやひたるかおほくミえたり。わがいこへる米屋といふ家のとなりあたりにては、男女うちまじり、ぶんこ上るりの哥うたひ、さミせんしらべ、つゝみたいこならし、酒のみ、さわぐさま、さらに山中とはおもはれす。このむかひに石坂ありて、ちいさき神のミやしろあり。しだり桜いまさかり也。

かへり行はるやとまりて箱根山いはねの桜今さきぬらんすくも川（22ウ）にも、さくらよくさきてさかり也。こは山中のゆゑに、かくおそきなめり。

すくも川杉のこすゑに遅桜ミつのひくきにうくひすの声

まじりてと、いとおかし。大沢、女ころばし、さて川ばたの立場、こゝにて湯本さいくをうる。近きころ、火の災ありしとて、家居あらた也。さるはし沢、二ツ坂、くつわり坂、じあけ坂などへて、湯本の立場、こゝも家居おほくてよし。正眼寺曽我の堂、こゝにもさくらあり。さかり也。されとあたゝかなる所にて、青葉しけれり。宗雲寺よき寺也。五代のあるしの墓ありとぞ。三まいばしハ、早川といふにかゝる。この川、大なる岩ありて、おもしろきけしき也。山崎、いりう田、かざまつりの立場、さて大なる地蔵堂ある所、小田原の入口也。こよひは、この城下の清水屋といふ本陣に、はやくやどる。日なほ高し。誠や(23オ)千ゆらのゝりてきしかこに、はたより小田原まてのりつ。

廿六日、けふもよき日也。されど、ふじハかすみてよくも見えす。小田原よりハ、また海のへり也。一色といふをこえて、酒匂川、こゝもかちわたり也。連だいにてこゆ。大井川のとハこよなくて、あやふからす。この川をまりこ川とも、相模川ともいふとなり。大磯まて道ハよけれと、坂多し。袖師か浦といふ、まへ川町、やむらあたりとなん。

ふるさとをしのへハともに旅衣そてしかうらの波をかけつゝ

おし切坂、をしきりばし、梅沢むらにハ、ふぢのきてらといふありて、大木の藤ありとそ。花さかバ入て見ましをとて、よそに過行。元梅沢に、梅川ばしとかいふ土橋のつめに、はし本といふ茶ミせ、きよけならねとをかしけなれハ(23ウ)、ゆるやかにやすらふ。しぼミ、国府かう新宿、中廻り、こを俚俗なかまろとよへり。相模の国府のあと也。あハもち名物也。地蔵の切どほし、こゝの地蔵ハ、化て人を訛(ママ)かし、勇士にきられしといひつたふ。開帳せされハ見えず、たゞかねうちならすのミ。小磯、大いそとつゝきたり。大いそ入口に、しきたつ沢のあとあり。ちいさき寺にて、俳諧師三千風かいとなみし也。人のよくしる処也。

こゝとしもむかしのあとをさたむれハさすかにものゝあハれ也けり

おほいそは、むかしハいろ〳〵ありけん、とめ女もよからす、きたなけなる宿也。けはい坂も坂ハなし。かうらいじむら、花水ばしはよきはし也。平塚はよき宿也。道、大磯より廿六丁の所也。やはたむら、八幡宮あり。つるみね山といふ寺あり。この所より、大山へ行道あり。馬入川、船にてわたる。なんごの(24オ)まつばらにて、子ども、く

わしの箱をかゝへて、多くハほそ長きあめをいれ、くち〳〵にすゝむる。いとかしまし。一本四文であめをかいなせへ、あめかいなと、くりかへし〳〵いふ。小はた、よりや(ッ?)、はつとり、しきぢ、くるま田、さて藤沢也。こゝもやけて、今家たつるころ也。宿いてゝ、山みち也。坂おほし。をかしからぬミち也。かげとり、はら宿なといふ立場あれと、よからす。松なともなくて、はげたることき山、両方にありて、めくり〳〵て行に、おりもし、あかりもし、いと〳〵長く、うみはつる道なり。しらつち坂、大さかなといふか、からうして戸塚へたとりつきぬ。おもたかやといふへいるに、いとせまくきたなく、一夜のやとりとハいへど、たへがたし。かハやもふろも、いと〳〵きたなし。かゝる家に似す、とこにハかけもの三ぶくまてかけたり。されと、紙の表飾やぶれそんじて、画はもとよりつたなく、たゞほし見せの（24ウ）こゝちす。からかみも画ありて、四季の山水花鳥、江山文明と落款したり。さすがにあたらし。たうべものは、さのみかハらず。いでや汁も何も、旅はよくもあらねと、関の東ハ、都路よりハいとよし。こたびも、ごゆのあふみやハ、心ある料理なりき。しまだの大やふ屋にて、つぼに、いもをみそにてにたるをもりたるハをしかりしに、くろ天のことく、ぬかの匂高きいひの、こハかりしこそかなしかりしか、おきつのは、かの大ひらなと、おごりたるさま也。あさのひら、手うち、とうふいとこまかくきよらなりき。小田原にて生鱈といひしもの、鱈とハいとこと也。何なりけん。はこねのあかはらといふいをハ、うまかりき。しらすかのいわしも、わかたへたる八文の時は、めつらしくていとうまかりしを、浜松にてくひし時は、おほけれはあきて、くふへくもおもはさりきなど（25オ）、たかひにいひ〳〵寝にけり。

廿七日、おそくたつ。よし田、かしを、たごゆ(やゝ?)、しなの、こゝにしなの坂あり。やきもち坂といふもあり。もちをやきてうる家ハなし。このあたりより坂おほし。ごんた坂といふもあり。むさし、さがみのさかひに、よき立場あり。さかひ木といふ。すべて、平塚あたりよりこなたは、大山、江のしまなどへ奉る提灯いかめしく、大やかにこしらへ、あかくもあをくもいろどり、いと花やかに物して、それを立場〳〵の茶店にかゝけいだしあり。挑灯をかける台も、ほりものし、漆にてぬり、金具のひかり、かゝやかしたり。このさかひ木なとら(ュハ?)、ことに花やかなるあり。家居もにきハゝしく、きよし。小田原よりこなたは、やう〳〵

に江戸のふりにうつりて、あまさけやの釜なと、はかなきはにふの小屋のにても、真鍮のひ（25ウ）かりまばゆく、万のかんばんも、かんばんかきの手してかけば、手はあしけれど、物〳〵しうにきハ、しく見えて、はたやれそんじたるハなし。ごんた坂こえて、元町、さて程がや也。こと〳〵くくさやぶき也。されとも二階なとよくつくりて、はたごやいとよきもあり。出口にて、女ともの人をとむる事、箱根の峠とひとし。はしをこえて、朝日や新町のうち、山形やといふにいこふ。これよりまた海べになりゆく。しぼふ、かるい沢、さてかな川の台也。本牧のおき見わたされて、景色いとよし。おもへハ、いと遠くもきにけるかな。伊豆の山〻もミえす、上総下総の方、山〻いと遠く見えわたりぬ。宿はいとよし。青木町といふは、長きあひだ也。この宿もやけて、家居あらた也。この宿に、長しまやといふはたごやあり。わが師、この家まてむかひに来てましなど、かねて消息ありけれは（26オ）、もしおハしたるにかと、その家へ入てとへども、さる事なしとこたふ。なか〳〵に、おはしたらんもかしこければとて、もしおはさハ、かう〳〵のものまゐりつとつけ給へといひて、こゝをいづ。入川むら、こやす、なま麦の半まて海べりにて、またやう〳〵海辺をはなるゝみち也。なま麦ハ、いと長きむら也。津る見ばしをわたり、つるみの立場、まんちゆうの名物かハんとせしを、いまだつくらさりけれは、えかハす。八丁なハてといふすぐなるみち、松なとの並木はなし。こゝを過て、川崎也。けふはあさのほどくもりて、のちはれたり。未の斎やゝ過るころなれば、いそがハ江戸へつかるゝ日なれど、山本某のいふにまかせて、この宿の笹屋といふにやとりぬ。こゝもきよけにあらす。和合神、（し？）天満宮、清正公のかけものなとかけたるハ、きのふのほう見せよりまたおとるこゝちす（26ウ）。母めく女の目やみて、めしいの如くさぐりあるくもふびん也。女ども〻、かみもみたれ、ころもあかつきやぶれたり。まつしき家なるへし。ゆどのもはか〳〵しくもあらす。庭のすみにものかこひて、をけをすゑたる也。外の方より見えじがために、桶のふたに木をうちつけて、ゆに入る時ハ、そのふたをたてかけて、おほひとすなり。こは、よんべのおもだかやもしかこそせしが、ありやけのあふらもうをのをつかへは、なまくさく、あしきかぞする。かゝれども、もなく、事なく、こゝまてきつる事、あすハとく江戸へつくべしと、うれしさものに似ず。酒肴てうぜよとかねわたせバ、やがて

朱ぬりの台に肴のせて、酒あたゝめもて来ル。台はねこあしのたくましきにて、江戸にてもちふるとひとし。あいなめにわらび、しやうがをあしらひ、まぐろのさしみに防風をつみそへたるも、さすがに（27オ）あつまぶり也。こは、台の物やよりもとめしにて、この家の庖丁にはあらず。そばをかへバ、これも朱ぬりのせいろうにて、江戸のと同し。かみゆひ、ゆひき、酒たうべ、いたく酔て、いひもたうべず、ころ〳〵とねつ。

廿八日、さてけふもすこしくもれり。朝ゆるやかにおき、六郷の川をわたる。こはむさしの玉川也。川上に矢口のわたしあり。六郷、ざうしき村、新宿、かまだ、さて大森也。こゝは家居ハおほく、にぎハゝしき所也。麦わらにてこしらへたるもの、をさなこのもて遊ひものハさら也、笠、てばこ、ふえ、さま〳〵のもの、めもあやにならへたり。また、しゆろのけもてこしらへたる、わざをきのかつらもおほくうる。江のしま、かまくらへ行し江戸人のかへさなとには、鶴見まんぢゆうをゑほしかこにいれてたづさへ、かのめこせんべいうちくひつゝ、めてた〳〵の（27ウ）若松さまよと、竹のつえもてひやうしどり、梅木わちうさんの見せさきそゝりゆくも、いとをかし。かのかつらかいて、かしらにかぶり、しばらくのつらねさへづりゆくも、家の翁や馬鹿ものと、ひたひに筋くまはみいだし、のゝしるべしとせうし也。施茶あんといふは、茶ミせなれど、茶をやほとこすらん。おもしろき門たてゝ、聯額などかけてミやひたり。茶漬も名物とて、いかめしき家とも多し。のりはる見せもつゞきたり。やはたむら、不入斗村（いりやます）、すゝのもり、このあたりよりむけに海ちかく、波もこゝもとへうちよするに、ヒゞといふもの、つみある。こは、冬のほど、のりをとる道具也。すゝのもりハ八幡宮ましませど、たれも〳〵、御仕置場とのミおもふめり。めしいの按摩とり、人をころし、きかねうはひしかハ、獄門にかけられしよしの札なと立あり。くびハなし（28オ）。常念仏のかりやあり。はま川といふをゆくに、あなごのかはやきうる家、つゝきたり。さみづ茶屋、海晏寺も、みちのをりならねハよそに見て、しな川へ来る。御殿山、八ツ山なとうしろにあり。この宿の入口にて、酒のみ、いひたうべなとす。刀、脇差のつかふくろはづし、ふぢくらさうりにはきかへて行。江戸の入口なれは、人のゆきかひしけき事、まつり、開帳なるあるかとおもふはかり也。車のかけこゑ、かこのかけ声、物うる声もたえす。やすめ〳〵といふこゑ

もかしましく、人足のなかもち哥、女大夫の今やうぶし、いはんすべもなくさわがし。品川はなれ、高縄は片かは町にて、海辺にハ、よしずにてやねふきたる水茶屋、数百軒のきをならべたり。つくだじま、石川しまより江戸の町〻さしいで〻、うしろは神な川のあたりまて見え、南ははてなき海にて（28ウ）、げにあつまの都の入口なんめりとおぼゆ。東海寺ハ品川のうち也。大仏、泉岳寺のまへを過て、大木戸也。それより牛町一丁、田町九丁、本芝四丁、かな杉町四丁、此間に芝はし、金杉はしあり。はま松丁四丁、神町町（明？）、うた川町、芝井町二丁、露月町、源助町、芝口町三丁、こゝに新橋といふあり。これより山本某は南へ入て、とのゝ御くらやしきへゆかる。さていづも丁、竹川町、をハり丁、大丁銀座の町四丁、さて京橋也。南伝馬町三丁、中はし、通丁四丁、さてなん日本橋をわたる。長さ二十八間ありとなん。大木戸よりこれまて、川をのぞきて四十七丁、品川より二里ありとそ。

むそちあまりむつのくに人きつとひてよにひにわたるひのもとのはし

日ハとをか国ハ七くにもゝたらすやそにあまれる里をこえこし（29オ）

うれしさハそてにもあまる旅衣はるけきみちをもなくきぬれハ

さて室町三丁、十軒店二丁、のり物丁、かち町、なへ丁二丁、新石丁、すた丁二丁、さてすちかひ御門也。この間に今川ばしあり。日本はしよりこゝまて、十三丁もあるへし。山口といふにて、そばくひ、やすむ。まことや日本ばしあたりにて、あめふりつ。のちよくはれつ。かくて柳原のどてをつたひ、五丁ばかり南へゆき、和泉どのばしを北へこゆ。この川は、両国、柳ばしへつゞきたり。さて北へ八九丁もゆく。この処、おかち町也。加藤遠江守の君のやかたのうらを、南へすこし入る。こゝに御先手のくみやしきあり。惣門を入、一ッのほそきほりをこえ、また北へ入る。さてなん、柳亭の翁のいへなりけり。師も家にありて、たかひ（29ウ）によろこひあひ、うれしさかぎりなし（30オ）。

付記　御蔵書の翻刻紹介をお勧め下さった鈴木重三氏の御芳情に厚く感謝申し上げます。